

論理的なレポートの書き方

——バカロレアの哲学論文に学ぶ——

● 鈴木 暁

要旨

レポートの論理とは何か。レポートに関する様々な資料を読むと、論理の重要性には触れるが、どうすれば論理的なレポートを書くことができるか、その説明はない。たまたま YouTube でバカロレアの哲学論文作成を講義する動画を視聴したところ、長年の疑問は一気に解決した。その動画から学んだことは、レポートには何よりも形式が重要であるということである。YouTube で学んだ形式を軸に、他の資料にあるパラグラフ構造の説明を総合すると、序論で提出された問いが、論述が進むにつれ焦点が絞られ、最終的な結論に収斂される。こうして構成されたレポートが論理的なレポートであり、このように構成される形式こそがレポートの論理である。

キーワード：レポート 論理 形式 バカロレア 哲学論文

はじめに

筆者は2013年度以来、ある大学でアカデミック・スキルズという科目を担当している。これは『アカデミック・スキルズ 第3版』（以下、『アカスキ』と略す）を教科書とし、様々な学習単位を通じて大学での学びの基礎を学習する、初年度学生を対象とした演習科目（以下、本演習とする）である。シラバスに記されたその最終目標は「きちんとした研究レポートを書きあげること」である。

ところで、レポート作成において最も重要なことは何だろうか。様々な答えが考えられるであろうが、筆者はそれは論理であると考えている。実際『アカスキ』にも「論」「論旨」「論理」「論理性」「論理的（な）（に）」という論理に関連した語が合わせて93回使われていて、「論理的（な）（に）」だけでも42回に上る。これだけ多く使われているこれらの語ではあるが、不思議なことにその定義がない。確かに「全体の流れが論理的になるように、各文をつないでいく。文章をつないでいくときは、接続詞の選択に気をつけよう」（P. 86 強調は原文）、「論理的というのは、言葉と言葉の意味がきちんとかみ合いながら伝わっていることである」（P. 127）とい

う説明はあるが、これは文と文の意味あるつながりと正しい語の使い方についての注意でしかなく、この注意を守っただけで論理的なレポートを書くことができるわけではない。

レポートの論理とは何か。論理的なレポートを書くにはどうしたらよいか。本演習を担当するようになってから、レポートや論文に関する様々な資料を読んできたが、論理の重要性には触れるものの、レポートの論理とは何かという筆者の素朴かつ本質的な問いに答えてくれる資料に出合うことはなかった。思い起こしてみると、筆者も学生時代よりレポートや論文を何本も書いてきたが、その書き方を習ったことはない。従って、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら、自分でも完全に納得することがないままに本演習を担当していたのである。

ところが2017年のある日、たまたまフランスの大学入学資格試験に相当する、バカロレアでの哲学論文作成を講義する YouTube 動画を視聴したところ、筆者の長年の疑問は一気に氷解した。まさに目から鱗の思いであった。この動画を理解した上で、それまで読んできた様々な資料を改めて読み返すと、それらの資料には参考になる点多々あるが、それでもやはり論理の意味がはっきりしないために、今一つ理解しづらいところがある。しかし、この YouTube 動画を軸として、その上でそれらの参考資料を活用すれば論理的なレポートを書くことができるようになる。

本来であれば、わかりやすい具体的な例を挙げながら、また、適切な練習問題をも加えながら、論理的なレポートの書き方を系統立てて説明するべきであろうが、紙幅も限られているので、本稿ではレポートの論理に重きを置き、その他の点については各種資料を利用することにする。以下、レポートの定義と作成の手順についての重点を簡単に説明した上で、レポートの論理に進む。

1. 1 レポートとは何か

本演習で筆者は、大学で課されるレポートとは小論文のことであるとし、論文には「ある問いに対し、客観的な根拠を元に、結論を導く、形式に従って構成された、パラグラフの総体」という定義を与えている。一言に論文と言っても、小論文から学術論文に至るまでいくつもの種類があり、その規模や学術性に違いはあるが、論文である以上、その根幹はすべてに共通である¹⁾。

1. 2 作成の手順——テーマと問い

次はレポート作成の手順である。レポート作成の手順は、①テーマから問いを導き出す、②

資料検索と資料読み、③アウトライン作成、④下書き、⑤清書、の5段階である。

上記手順の説明でテーマと問い²⁾という語が出てきたが、まず押さえておかなければならないのは、澤田(1977, 1983)が随所で指摘しているように、テーマではレポートを書くことはできないということである。すなわち、レポートとは個々の具体的な問いに答える、まとまりのある文章であり、テーマとは、その個々の問いを最大公約数として包含するより上位の概念に他ならない。後に例として挙げる「外遊時代の永井荷風」がテーマであれば、その時代の荷風に対する具体的な問い、例えば「荷風のフランス語能力はどれほどであったか」、「アメリカ滞在中に荷風の関心はゾラからモーパッサンに移行したが、その要因は何であったか」、「『放蕩』の主人公小山貞吉はどこまで荷風の実像を伝えているか」など、具体的な答えを導き出すための学問的な問いがレポートの問いである。本演習では学生はまずこのことをしっかりと頭に入れておかなければならない。

1. 3 作成の手順——資料検索と書誌情報の記録

本演習では、次の手順である資料検索は図書館実習という形で図書館職員が行っている。その実習には筆者も立ち会ってはいるが、筆者は司書資格を有していないので、この点に触れるのは適切ではないだろう。資料検索の基本は、例えば『アカスキ』(PP. 63-71)に載っている。

ところで、レポートでは末尾に参考資料一覧を挙げなければならないので、資料を検索、入手したら、その都度書名や著者名等の書誌情報を記録しておかなければならない。今ではレポートはパソコンで作成するのが普通であるから、OPAC や CiNii、NDL ONLINE 等のインターネットで検索した場合は、書誌情報は簡単にコピー&ペーストすることができる。

1. 4 作成の手順——資料読みの際のメモ取り

問いを決め、必要な資料を揃えたら、次は資料読みの段階に進む。資料読みで大切なのは、必ずメモを取りながら読み進めることである。筆者も学生時代に、指導教授から必ずメモを取りながら読むように言われたが、メモを取るというのはどういうことなのか、具体的にどのようにしたらよいのか、そもそもレポート作成における資料読みとはどういうものであるか等の指導は受けなかった。やはりこのことについても、レポートや論文に関する本をいろいろと読んで考え、自分なりに試行錯誤を繰り返してきた。

レポート作成におけるメモ取りというのは、資料を読みながら、自分の問いに必要な情報を、一般に研究カードと呼ばれる B6版のカードに、細大漏らさずに書き留めることである。基本

的に一度メモを取った資料はもう読み返さないで、その資料の中の、自分の問いに必要な事項はすべてメモしておかなければならない。メモしておかないと、読んだ内容を忘れてしまうこともあるし、論述に必要な不可欠な情報がどの資料のどこに書かれていたのかわからなくなり、もう一度資料を読み返して探すという二度手間を犯すことになってしまうからである。図書館の資料を使った場合、当該資料が貸し出し中で確認できなくなり、結局は使うことができなくなってしまうということも起こり得るし、もしその資料が自分の問いにとって本質的なものであれば、レポートを書くことすらできなくなってしまう。

メモ書きにはいくつかの注意事項がある。必ずしも B6 版の研究カードにこだわる必要はないが、すべて同じ大きさのカードに統一した方がよく、カードの表面のみを使い、一枚のカードには一つの事項のみを記入することが大原則である。特に最後に挙げた一カード一項目の原則は重要である。メモに関しても澤田 (1977, PP. 65-76) が研究カードとして、实例を挙げてわかりやすい解説をしている。

本演習を担当している大学で、筆者は数年来外遊時代の永井荷風の作品の購読の講義も担当している。そこで例えば、滞米時代の荷風にとって最も重要な人物の一人であるイデスをテーマとしたレポートを考えてみよう。固有名詞としてのイデスは『西遊日誌抄』と「西遊日誌稿」に合わせて35回記載されているが、無論そのすべてをメモする必要はなく、自分の問いにとって必要な箇所のみでよい。例えば、荷風がイデスと交わした会話が必要であれば、その日時、場所、内容を、その資料の何ページに記載されているかを含めてメモをする。出会いと別れの日時だけが必要であれば、B6版だとかなり余白が出てしまうが、それはまったく構わず、必要事項だけを記入する。もし二人の会話の一言一句が重要であれば、それをそのまま書き写すし、最初の出会いから最後の別れまでを簡潔にまとめたのであれば一枚のカードに収まるように書き入れればよい。いずれにせよ、先に述べたように、自分の問いを解くのに必要不可欠な事項を、一カード一項目の原則に従って記入して、次のアウトライン作成の段階に備えるのである。

メモには、資料に対する自分の評価を書くコメント、資料をそのまま書き写す引用、そして資料の内容を簡潔にまとめる要約の三種がある。要約については河野 (PP. 20-21) が大変わかりやすく説明している。

ところで、今まで述べてきた資料読みの際の研究カードへのメモ書きは手書きを前提としていたが、スマートフォンを効率的に使うこともできる。今では様々な機会にスマートフォンを使うことは普通になってきたし、レポートには提出期限があるから、時間の節約ができるので

あればスマートフォンは大いに活用すべきである。資料を引用したければ、カードに手書きするよりも、スマートフォンで撮影し、それをOCRで文字化した方が正確で早いこともある。資料のコメントや要約の場合は、音声入力し、それから文字化することもできる。

しかしここで注意しなければならないのは、スマートフォンを使う場合も、メモ書きの際の一カード一項目の原則と同じように、一つひとつの事項を別々のファイルにしなければならないということである。そして、次のアウトライン作成の段階でレポート全体の骨格作りをするが、そのときには記入し終えたすべてのカードをまとめて考察し、カードを並べて論述の流れを作り出さなければならないので、スマートフォンを利用したとしても、一つひとつのデータは必ずカードに印刷しなければならない。すなわち、スマートフォンを使用するのであれば、データベースを適切に使うことができなければならない。これが必須条件である。

1. 5 作成の手順——アウトライン作成

次にアウトライン作成に移る。アウトラインというのは、上にも述べたように、レポートの骨格のことである。具体的には、今まで記入してきたカードをよく見て、問いからどのような答えが導き出されるか、それを筋道立てて説明する、その流れを作るのである。先に述べたように、この段階までくると、もう資料そのものを見ることはなく、カードを広い机の上などに並べて置き、問いから答えに至る論述の流れを筋道立てて作っていく。資料読みでスマートフォンを使ったとしても、一カード一項目の原則に則り、カードに印刷するなど、データベースを適切に使えなければならないと言った意味がここにある。そしてアウトライン作成で特に気をつけなければならないのは、結論はアウトラインの流れから自然と導き出されなければならない、決して自分の結論に都合のよいようにカードを並べてはならないということである。

1. 6 作成の手順——下書きと清書

記入したカードを見ながら作成したアウトラインを文章化すれば、下書きができあがる。もし下書きがうまくいかないようであれば、それはアウトラインが適切にできていない証左であるから、もう一度アウトラインを作り直さなければならない。

アウトラインがしっかりできあがっていれば、あとは下書き、清書へと移る。パソコンでレポートを作成するのであれば、清書の段階では、下書きの微調整は簡単である。あとは『アカスキ』（PP. 163-164, 178-185）に倣って註と参考資料一覧を書き加えて清書をすれば、レポートの完成である。

ここまでをまとめると、レポートはテーマで書くのではなく、テーマから問いを絞り込まなければならない。資料を読む際には必ずメモ取りをしなければならない。こうした下準備の次に、アウトラインというレポートの骨格を作り上げる作業を行い、その後はそのアウトラインに従って下書きをし、最終的に清書する。

大学初年度の学生には、問い、資料読みにおけるメモ取り、それにアウトラインは初めて聞く語、並びに作業かもしれない。またテーマを絞って学問的な問いを導き出すということは、難しく感じるかもしれない。しかし澤田(1977, P. 227)が引用するクインティリアヌスが *reliqua est exercitatio* と言うように、練習を重ねることによってその困難を乗り越えたら、あとは『アカスキ』(P. 86とP. 127)にある文と文のつながりと言葉の正しい使い方に注意して書けばレポートはできあがる。実際『アカスキ』(P. 9)にも「答えを導き出すことより、問いを発見することの方がずっと困難な作業である。問題が適切に発見できれば、その問題は8~9割方、解決していると言うこともできる」と書かれている。従って、初めに挙げた論文の定義も「ある問いに対し、客観的な根拠を元に、結論を導く文章」で十分ではないか、という異論が出るかもしれない。

しかし筆者が論文の定義に「形式に従って構成された、パラグラフの総体」とするには、無論議がある。そしてこれがレポートの論理につながるのである。

澤田(1983, P. 20)は、よい論文を

何をいおうとしているのかが一目瞭然、主問・副問が何であるかがはっきりしており、それに対して十分確証ある答を与えている論文、つまり統一、連関、展開において優れた、明快な論文(ふりがなは省略)

と説明しているが、そのために決定的に重要なのが、形式とパラグラフである。そして筆者がその形式の重要性を学んだのが、初めに述べたYouTube動画であった。論文作成の原理・原則と実例を講義したその動画を軸とし、それに他の資料からの情報を組み合わせれば、論理的なレポートを書くことができるようになる。次にその説明に移る。

2. レポートの論理——形式とパラグラフ

「事件が起こり(=問題提起)、探偵が証拠と推理によって事件の解明を目指し(=本論)、最後に犯人を特定する(=結論)」と河野(P. 51)は論文を推理小説に例えているが、現実の事

件においては、捜査機関は、考えられ得る限り、どんな小さな手がかりをも見逃さずに、着々と捜査を重ねて容疑者を特定するであろう。しかし容疑者を特定しただけでは事件解決とはいかない。警察から容疑者を送られた検察が、裁判所に公判を請求し、公判を維持し、有罪を勝ち取るためには、手当たり次第に始められた捜査を整理した上で、犯行の動機、経緯や様態等を秩序立てて明らかにし、事件の全容をわかりやすく言明できなければならないであろう。

レポートの場合もまったく同じである。レポートというのは、問いに答える文章であるから、問いと答えが噛み合っていれば、レポートとして成立し得るように思われるかもしれないが、単に問いから答えが導き出されれば、それで十分というわけではない。その問いがどのような手段や手順で考察され、結論が導き出されたか、問いが結論に収斂されるその経緯が他者にも了解できるように書かれていなければならない。そして、問いから答えを導くために絶対的に必要なもの、それが形式である。レポートには形式が絶対的に必要であり、形式こそが論理である。それを教えてくれたのが、Mathilde が講義する2本の YouTube 動画であった³⁾。

「方法理論」編 (1分0秒から1分19秒) で、Mathilde は哲学論文作成の講義に当たり

これから哲学論文に必要な手順は何かということはこの講義で説明しようと思います。というのも、哲学において、それはとてもアカデミックな練習だからです。尊重しなければならない厳格な規則、手順、そして段階がありますから、当然それらを知らなければなりません⁴⁾

と述べているが、Mathilde の言う「厳格な規則、手順、段階」、これこそ筆者の言うレポートの形式であり、レポートはこの形式に従って作成しなければならない。

Mathilde による2本の講義は、合わせて1時間近くの動画であるが、その中で論理とは形式であるという説明があるわけではない。それどころか、『アカスキ』で合計93回使われている「論理」等の語は一つも使われていない⁵⁾。しかし以下に引用する他の資料を読み合わせながらこの2本の動画を、内容を反芻しながら繰り返し、繰り返し視聴すると、論文という論理的な文章を書くためには確固たる形式に則らなければならない。そしてその確固たる形式こそが論理なのである、ということが自ずと理解されよう⁶⁾。

ところで日本でフランスのバカロレアが話題になる場合、たいていは哲学の問題の難しさに驚いたり、あるいは単なる暗記ではなく深く考えさせる問題が出題されることの方に目が向けられがちで、その問題をどのように考え、どのように解いていくのかといった解法のプロセス

や、そもそも何故普通バカロレアですべての受験生に哲学の試験が課せられるのかといった本質が問われることはない。坂本(2018)がバカロレアの本質を考える上での好著を著しているが、それに対して鹿島(2018)が書評を書いている。鹿島は、実際に出題された問題の模範解答の概略を述べた後、

以上のような模範解答を見て読者はどう感じるのでしょうか？ 高校生が本当にこんなことが書けるかと疑問に思うだろう。しかし、書けるのである。考え方の『型』を学んでいるから。あるいはこんなに平凡な結論でいいのかと思う人もいるかもしれない。いいのである。バカロレアで問われているのは思想ではなく、考え方の『型』の修得度だからである(強調は引用者)

と結んでいる。考え方の「型」という鹿島の指摘は非常に重要である。

バカロレアではないが、別の例を見てみよう。日本語の文章をフランス語に翻訳する作業について大賀と討論を行ったメランベルジェ(1987, P. 107)が、フランス語の論文構造を端的に次のように述べている。

私は大学院で、フランス語での論文の書き方を指導する、*concours de français* の準備のための授業を担当しているんです。今年(1985年)の問題は roman についてだったのですが、ものすごく知識のある学生が受からなかった。やはり、**forme** を守らなかつたんですね。反対に、あまり知識はないけれども、**forme** を守ってきれいにまとめた学生が通ったのです。実は私も読んだんですよ。内容はたいしたものじゃなかった。でも、スッと読める。premièrement, deuxièmement, …とやっていって、conclusion をきれいにもってくるわけです。tragédie classique みたいにね。formalisme ですよ。(・・・) **forme** が守られていないと、フランス人は読めないんです。何を言っているのかがわからない(強調は引用者)。

つまりこういうことである。フランス人は物事を考える場合、*forme* (形式) に則って考えるから、その形式に則って書かないと読む者には通じない。従って、自分の思想を表明する場合も形式に則らなければならない。鹿島の書評の「型」もメランベルジェの「*forme*」も同じ意味であるが、論文にとって形式が如何に重要であるか、その絶対性がよくわかる例である。

ここで YouTube 動画に戻る。バカロレアの哲学には、短い哲学的問いに対して論文を作成す

る問題が2問、10～20行程度のまとまった文章に対する説明論文を作成する問題が1問出題され、受験生はこのうちの1問に解答する。

「理論の実践例」編で Mathilde は「国家への服従は常に義務であるか (L'obéissance à l'État est-elle toujours une obligation?)」を例題として講義を進める。まずこの問いに答えるために、次の6つの工程に渡る準備作業を行わなければならない。①出題文をよく読み、前提事項は何か、問題点は何か、重要な概念は何かといった主要要素を抽出する。②重要な概念に定義を与えることによって、その概念を分析する。③出題文から、何、何故といった本質的な問いを見出す。例題の場合は、国家とは何か。何故国家が創られたのか。国家の役割とは何か、などなど。④出題文について問題提起を行う。ここでは「常に」が重要な問いである。⑤参照し、引用する哲学者・思想家を選ぶ。⑥論文の構想を立てる。構想とは、結論を導く、問いに対する自分の思考過程のことである。この6工程を踏んだ上で次の論述の段階に移る。

論述は序論・本論・結論の三部構成にすることが勧められる。序論もまた三部構成となり、まず出題文に対する全般的な考察を行い、次に問題提起をし、そして論文全体の構成を伝える。本論では正・反・合の弁証法に基づいた議論が推奨されるが、正・反・合のそれぞれもまたいくつかの下位部分に分けて論じ、正と反、反と合の間には、論述の流れをスムーズにするため、疑問文による「議論の推移⁷⁾」を入れることが求められる。そして結論ではこれまでの議論を総括してまとめる⁸⁾。

ところで、先に引用したメランベルジェは「formalisme (形式主義) ですよ」と言っていたが、それに対し大賀 (P. 107) は「審査員に日本人とフランス人がいると、いつも意見が分かれるんです。日本人は内容を重視するんですね」と応じる。物事を形式と内容に分けて考えることがよくあり、日本人であれば大賀の言うことももっとも思うかもしれない。しかし論理的な文章であるレポートの場合は、形式は内容を含むことに留意しなければならない。すなわち、レポートの形式とは、必ず内容を伴って展開されなければならないものである。これに関しては、スコラ学の形式が非常に役に立つ。しかし、スコラ学の形式の説明に進む前に、澤田 (1983, P. 114) が「ミニ論文」と形容するパラグラフについて考えなければならない。

すでに述べたように、アウトラインというのはレポートの骨格であり、アウトライン作りの目的は、問いからどのような答えが導き出されるか、それを筋道立てて説明する、その流れを作ることである。

それでは、レポートの流れはどのように作っていったらよいであろうか。例えば、このレポートの問い (= 主問) は、こういう点で関係づけることのできる、これとこれの問い (= 副問 1

と副問2)に細分される。副問1にはこの資料とこの資料からこういう答え(=答え1)が導き出される。同じく副問2はこの資料とこの資料からこういう答え(=答え2)が導き出される。そして、答え1と答え2を総合して主問への解答が出される⁹⁾。カードを見ながらこういう流れを作り出していくのである。そして、カードを使って作り出した流れに従って、具体的な下書きを始める。

この具体的な下書きのためには、パラグラフは非常に重要な概念である。パラグラフは日本では一般に段落¹⁰⁾と呼ばれるが、日本語の段落には明確な定義がないために、澤田(1983)も河野(2018)も文段という語を使用している¹¹⁾。情緒的な作文や随想ならともかく、論理的なレポートでは、きちんとした定義のできている英語のパラグラフの定義、並びにパラグラフ・ライティングを採用するのが定石である。

英語で one idea, one paragraph というように、一つのパラグラフの中にはそのパラグラフの中心となる一つの考えしか書いてはならない。しかしその考えは、往々に抽象的であることが多く、従ってその考えを考えとして表明するだけでは不十分で、そう考える理由や根拠、事実等で説明しなければならない。そして、一つのパラグラフの中で中心となる考えを表明した文、これを主題文と言い、その主題文を説明する文、これを支持文と言う。従って、パラグラフとは「一つの考えを述べた主題文とその主題文を説明する支持文から成る文の総体」と定義することができる。

そしてパラグラフに関しては、2つの重要な点を抑えておかなければならない。第一点がパラグラフの構成である。主題文と支持文から成るパラグラフであるが、支持文の役割は主題文を説明することであるから、主題文と支持文とのつながりは明白である。一方、主題文を複数の支持文で支える場合、支持文それぞれは何の脈絡もなく独立しているわけではなく、支持文同士にもつながりが必要である。すなわち、支持文1と支持文2、支持文2と支持文3というつながりである。そして支持文1から支持文2、支持文2から支持文3へのつながりは意味的にスムーズでなければならない。このように一つのパラグラフ内では、主題文と支持文とのつながり、支持文同士のつながりがしっかりしていなければならない。こうした文と文とのつながりを成立させるのが、因果関係、前後関係、上下関係等を示す接続語である。『アカスキ』(P.86)の論理的とはこのことを表している。

パラグラフについての重要事項の第二点、それはパラグラフ同士のつながりで、第一点目のパラグラフ構成よりはるかに重要である。一本のレポートが一つのパラグラフから成り立つことはなく、必ず複数のパラグラフが必要である。ここで問題となるのはそのパラグラフ同士の

つながりである。複数のパラグラフは、決してそれぞれ無関係に、無秩序に並べられてはいない。アウトラインを作成する際、レポート全体の流れを考慮したが、レポートでは、問いの検討が進むにつれ、問題が徐々に絞られていき、最後に結論が現れる。優れたレポートはこのような構造を持つ¹²⁾。従って複数のパラグラフは、そのパラグラフを読み進めるにつれ、問題の核心が明らかになり、結論が導き出される、このような構成でなければならない。このような構成で並べられた一連のパラグラフのことを、筆者は総体と呼んでいる。

ここで、先に保留したスコラ学に戻る。言うまでもなく、トマス・アクィナスの『神学大全』はスコラ学を代表する著作である。山田 (PP. 70-71) の図にあるように、同著作でトマスは、聖なる教えという非常に大きな主題を扱うために、全体を第一部、第二部の一、第二部の二、第三部の三部に分け、第一部は第1問から第119問に、そして第1問は第1項から第10項に細分して論述している。すなわち、主題を可能な限り細かく分け、それぞれの解答を総合することによって、その大きな問題への解答をもたらすのである。

具体的なスコラ学の形式の説明として、『神学大全』の中で最も有名な、神の存在を証明する第1部第2問第3項を見てみよう。まず「神は存在するか (An Deus sit?)」という問いが提出され、それに対して、「・・・と思われる (Videtur quod・・・)」で始まる、神が存在しないと思われる異論が2点述べられる。次に異論を反駁する権威ある見解が反対異論「しかしそれに反し (Sed contra est quod・・・)」として提出された後、トマス自身の解答「・・・が言われなければならないと私は答える (Respondeo dicendum quod・・・)」へと進む。この解答で神の存在を証明した後、トマスは初めに述べられた異論に「それ故第一に対しては・・・と言われなければならない (Ad primum ergo dicendum quod・・・)」と答える。すなわち、異論→反対異論→解答→異論解答¹³⁾という流れである。そしてトマスは異論を提出する場合、数多くある異論の中から恣意的に選択するのではなく、敢えて有力なものを選び、反対異論は主に『聖書』、アリストテレスや教父の著作という権威あるものから取られる。

『神学大全』では主題→部→問→項というように細分して論じていったが、『神学大全』の最小単位の項に関しても、先に述べた厳格なパラグラフ構造に則って記述されていることは言うまでもない。しかしここで重要なのは、ただ単に細分することではない。『神学大全』は、一つひとつの石が積み重ねられて建造された中世の大伽藍に例えられるから、同書で最も細分された項を構成するパラグラフの文、語の一つひとつは、いわば大伽藍の一つひとつの石に相当する。その石も土台から順次高く積み重ねられていくから、項を構成するパラグラフの一つひとつの積み上げで、『神学大全』という全体が作り出されることになる。従って、レポート

の場合も、一つひとつのパラグラフが下から積み重なることによって、最終的な建築物であるレポートができあがるように構成されなければならない¹⁴⁾。このように構築された優れた論文が、註12)に紹介した、澤田が激賞するエルカン論文である。

筆者が主張するレポート書きにとって最も重要な形式だが、今までの説明は、フランスのバカロレアの哲学論文で推奨される、弁証法という哲学における議論の一技法と中世スコラ学の議論の形式のことではないか。これは日本の大学で課せられるレポートとは関係がないのではないか、という疑問が起きるかもしれない。これは一見もっとものように思われるが、しかしその疑問はナイーブである。確かにレポートは哲学論文ではない。しかし、レポートは論理的でなければならず、その論理を研究するのが論理学¹⁵⁾という哲学の一分野であり、『アカスキ』が論理的という語の説明に使う、言葉の正しい使い方と適切な接続詞による文と文のつながり、これは論理学の基本中の基本である。更に、『アカスキ』(P. 89)の「批判とは単に反論するだけでなく、その論を再検討してより良い、より正しい方向へと再構築し直すことである」(強調は原文)とはまさしく弁証法¹⁶⁾である。Mathildeも「理論の実践例」編(19分21秒から20分25秒)で、例題の「国家への服従は常に義務であるか」に対し

論文は唯一の方向へ行くことはできません。国家への服従は常に義務であると肯定する方向だけでも、その反対の、国家に従わない権利を有すると否定する方向だけでも行くこともできません。(・・・)哲学の目的は、自分の立場と意見に固執することではありません。(・・・)多少は他の方へも行って見ること、他のやり方で、他の視点で熟考することでもあるのです¹⁷⁾

と説明しているが、先に引用した鹿島が「バカロレアで問われているのは(・・・)考え方の『型』の修得度」であると評するように、バカロレアの哲学論文は、哲学における弁証法議論にのみ該当するものではない。そもそも普通バカロレアでは、すべての受験生に哲学論文が課せられることから、このMathildeの説明も、考え方における多角的な物の見方の重要性を強調していると取るべきである。また坂本が著書のそでに

フランス人は、幸福についてのさまざまな哲学的な立場や議論を学びます。そしてそれを哲学小論文(ディセルタシオン)という「思考の型」に当てはめて、自分なりに表現することを、高校時代に徹底的に練習しています。生きていく中で自分が遭遇した問題や困難

をどのように理解すべきか、人生をどのように切り開いていくかを考えるための実践的な道具が哲学なのです。しかし、これはフランス人の専売特許ではありません。誰でも「思考の型」を身につけ、活用しながら、この世界を生き抜いていくことができるのです。われわれもまた、幸福に至る道を見つけるために、哲学すればいいのです

と書くように、形式に則った議論を進めるのは、哲学という狭義の学問分野に限られない。決してフランスだけでなく、哲学だけでなく、より広い意味で、物事を考える上で形式が絶対的に必要なのである。筆者が Mathilde の動画を視聴して学んだことがまさにこのことであり、Mathilde の教えをレポート論述に適用する、これが筆者が本演習で学生に習得を求めることである。すなわち、レポートにはレポートの形式があり、その形式に則った議論を展開しなければレポートとは言えない、ということである。

論理的なレポートの構造が成立するためには、Mathilde の動画にもあった、問いの分析（語の分析・定義づけ）、そして文と文との流れを意味的にスムーズにつなげる「議論の推移」という文が必要である。すなわち、冒頭で提出された問いが分析、考察され、議論が進むにつれ、次第に論点が絞られてゆき、最終的な結論に収斂する、これがレポートの論理に合致した優れたレポートの構造であり、この構造は、Mathilde の方法を軸とし、それに他の資料からの方法を組み合わせることによってできあがるのである。序論で提出された問いが、論述が進むにつれ、論点が絞られ、最終的な答えに収斂される。こうした論述の流れが、註12)に挙げた、澤田が図示するピラミッドのように作られて初めて論理的なレポートとなる。そして、論理的なレポートの原理、原則を筆者が学んだのが、Mathilde の YouTube 動画であった。

「論文書きの真の構成原則である『序・本論・結び』」と澤田(1983, P. 31)が言うように、レポートは序論・本論・結論の三部構成による議論であるが、しかし単に三部で構成されれば、それでレポートとなるわけではない。先にも述べたように、形式には内容が包含される。内容に従った三部形式の論述、これがすなわちレポートである。その形式とは、パラグラフのところで説明したように、主題文と支持文のつながり、支持文同士のつながり、パラグラフとパラグラフのつながり、そして、問いの発出から始まり、議論が進むにつれ、問題が徐々に絞られ、そして最後に結論が現れる。これが優れたレポートの構造であり、この構造を成立せしめるのが、筆者の言う形式に則った議論、すなわち論理的なレポートなのである。

まとめ——レポート本文（序論・本論・結論）に何を書くか

序論

序論には、テーマから問いを導き出した理由をまず述べ、レポートの問いは学問的でなければならないから、次にその問いを問う意義を説明する。そして最後に問いを問う手段と順を説明する。手段というのは、例えば、文献に当たってとか、資料の分析を通して、あるいはアンケート調査やフィールド調査の結果からなど、具体的な考察の方法のことである。また順というのは、主問を複数の副問に細分したとき、あるいは、複数の手段で考察を進める場合、どういう順で論じていくか、ということである。

本論

序論での予告に従い、具体的な論述を進めるのが本論である。アウトラインがしっかりしていれば、あとはそれに肉付けをして作り上げるのが本論であるから、アウトラインの重要性がわかるであろうし、本論ではパラグラフに特に注意して論述を進めなければならない。

結論

結論は、序論で提出した問いに解答を与える場である。澤田（1977, PP. 155-156）の説明にあるように、これまでの議論を振り返り、単なる鸚鵡返しではなく、別の言葉で簡単にまとめて、問いに答える。河野（PP. 50-52）は「『結論』は『本論』において展開した議論に基づいて、『序論』で提出した問題に対して解答を与える部分です。『序論』でも結論を示唆してお」（強調は原文、下線は引用者）き、一般に結論では、要約・結論・議論を行うと説明している。

ここで注意しなければならないのは、序論で結論に触れるのは無論のこと、示唆することすら不適切であるということである。河野はレポートを推理小説に例えていたが、序論で結論に触れるのも、示唆するのも、要するに推理小説を読み始めた人に予め犯人を教えることに他ならないからである。これまで述べてきたように、序論で出された問いの答えは、本論での分析が進むにつれ、的が次第に絞られていき、そして結論が見えてくる。これが優れたレポートの構造である¹⁸⁾。序論で提出された問いが、どのように分析、検討されて結論にまとめられるか、読者がワクワクしながら読み進めていく、そのスリルとサスペンスを味わうことができるのが、レポートの醍醐味であり、そのようなワクワク感、スリルとサスペンスを提供することができるのが優れたレポートなのである。

また河野（PP. 51-52）は議論に関して、「論じ残された問題点や今後の課題などの指摘などを

行います」とも書いているが、この書き方は誤解を生じさせてしまう。一本のレポートは、それ一本で完結していなければならない、そのレポートの結論に「論じ残された問題点や今後の課題」を書くというのは、そのレポートが不完全であることを自ら述べることになる。「論じ残された問題点や今後の課題」ではなく、「今後の展望」とすればよい。すなわち、本レポートの研究成果が、次のどの研究にどのようにつながるか、という記述であれば、それは十分意義がある。

そうではなく、例えばある問いに対し、それぞれ独立した A と B の両面から見ていかなければ全体像が見えないような場合、本来なら A と B の双方を論じなければならないが、様々な制限があり、片方しか論じることができないことがある。あるいは様々な制限があり、そのレポートでは論じ尽くすことができず、一部のみを論ぜざるを得ないような場合には——筆者が本稿「はじめに」の最後のパラグラフで書いたように——その旨を序論で断っておけばよい。

註

- 1) 参照した資料にはレポートと論文とが別々に説明されているものも多いが、以下の論述では、レポートと論文は、原理的に同一のものとする。河野 (P. 34) も「レポートも上述した論文の一形態であり、基本的な定義および要件は一切変わらない」(強調は原文)としている。
- 2) 『アカスキ』(PP. 18-19)にあるように、レポートの問いは学問的でなければならない。
- 3) Mathilde の講義動画は全部で9本挙げられているが、ここでは哲学論文 (La dissertation) に対する「方法理論 (théorie de la méthode)」と「理論の実践例 (exemple pratique de la méthode)」を取り上げる。
- 4) Je vais tenter de vous expliquer dans ce cours, quelles sont les étapes nécessaires à la dissertation, puisqu'en philosophie, c'est un exercice très académique. **Il y a des règles précises et des étapes, des cheminements à respecter et donc il faut forcément les connaître.** (強調は引用者 以下、フランス語からの翻訳は拙訳である)。
- 5) 実際には「方法理論」編 (22分16秒) に Logiquement, à la fin de la dissertation, vous devriez avoir un avis sur la question とあるが、これは「当然ながら、論文の結末では問いに対する一つの考えを持つべきである」という意味であり、ここでの logiquement は「論理的に」の意味ではない。
- 6) 考えてみれば、Mathilde の講義に「論理」等の語が使われないのも当然と言える。バカロレア自体はナポレオン時代に始まったから、200年そこそこの伝統しかないが、西欧人の

物の見方、捉え方、考え方、あるいは自説の表明、議論や討論の仕方等は、古代ギリシア・ローマ以来の自由学芸の枠組みで行われるからである。澤田(1983, P. 5)は「論文書きは(自由学芸の科目である 引用者註)レトリックの問題」であるとし、アメリカで論文指導を受けた加藤(PP. 62-63)も、指導教授から「私はギリシヤ・ローマ以来の西欧的伝統しか知りません(・・・)西欧の学問の祖は、ギリシヤの哲学者アリストテレスです。彼の『レトリカ』の英訳が図書館にあるはずです。そこから始めてごらん下さい」(原語は省略 ママは引用者)と勧められている。従って、自由学芸を知る者なら、筆者のように、Mathilde の講義を聴けば、バカロレアの論文構成が論理的であることが理解できるであろう。

- 7) des transitions「方法の理論」編(15分33秒)
- 8) Mathilde の説く論文作成のための6つの工程に渡る作業のうち、①から④は筆者の説明したレポートの作成の手順①「テーマから問いを導き出す」に相当し、Mathilde の作業⑤は筆者の手順②「資料検索」に、そして Mathilde の作業⑥が筆者の手順②から④「資料読み、アウトライン作成と下書き」に当たる。そして Mathilde の6工程を踏んだ上で進む論述が筆者の手順⑤「清書」に相当する。なお Mathilde の解答例については渡邊(2020, PP31-39)を参照のこと。
- 9) ここでは主問から副問1と副問2を導き出す例を挙げたが、レポートの規模によっては副問が不必要なこともあるし、逆に副問が3つ以上ある場合もある。主問を細分するということは、問題を多角的な面から考察することに他ならず、それだけ一層議論が深まり、客観性が増すことになる。しかし、字数制限等の理由で、副問に分けずに一つの問いのみを考察するというのは決して容易な作業ではない。『アカスキ』(P. 9)に「答えを導き出すことより、問いを発見することの方がずっと困難な作業である。問題が適切に発見できれば、その問題は8～9割方、解決していると言うこともできる」とある通り、テーマから問いの導出に当たっては、論点を絞りに絞らなければならないからである。
- 10) 『広辞苑 第七版』には「①長い文章中の大きな切れ目。段。②転じて、物事のくぎり」という説明がある。
- 11) 澤田(1977)では「段落」という語が使われている。
- 12) 優れた小論文の例として、澤田(1977, PP. 158-159)はウォルター・エルカンの「ナイロビにプロレタリアートが生まれつつあるか」を挙げている。
- 13) 『魔女の槌』といえば、中世魔女裁判の手引書としてあまりにも有名であるが、同書もま

たスコラ学の形式に則って記述されている。ある著者が同書を批判しようとしたものの、スコラ学に無知であったために、異論を解答と思い込み、まったく的的外れになってしまった例がある。この例については拙稿(2011)を参照のこと。拙稿を読めば、形式が如何に重要であるかがわかるはずである。

- 14) 論述が進むにつれ、論点が絞られていき、最終的な結論が導き出されるのがレポートであるので、『神学大全』が例えられるパリのノートル・ダム大聖堂のような大伽藍よりも、澤田(1983, P.110 図2)の図示するピラミッドをイメージした方がわかりやすいであろう。
- 15) 『アカスキ』(P.128)でも論理学の内容にまでは踏み込んではいないが、論理を研究する学問として、論理学の名称が紹介されている。
- 16) トマスの論法は弁証法ではないが、山田(1975, P.40-41)が解説するように、トマスは必ずしも異論を全否定することはなく、「・・・の限りにおいては(inquantum)」などと留保をつけることも多い。
- 17) Une dissertation ne peut pas aller dans un seul sens. Je ne peux pas aller que dans le sens de oui : l'obéissance à l'État est toujours une obligation ou au contraire aller dans le seul sens de non : j'ai le droit de désobéir à l'État. (….) Le but de la philosophie, ça n'est pas de rester campé sur ses positions et sur son opinion. (….) C'est aussi d'aller voir un petit peu ailleurs, de réfléchir d'une autre manière, d'un autre point de vue.
- 18) 澤田(1977, P.155)も『序』で解答を出してしまっただけではいけません。答は出るはずがない。答は研究の結果、最後に出てくるはずです」と書いている。

参考資料

1. 単行本

山田晶責任編集(1975)『世界の名著 続5 トマス・アクィナス』中央公論社

澤田昭夫(1977)『論文の書き方』講談社(学術文庫)

同(1983)『論文のレトリック』講談社(学術文庫)

大賀正喜・G. メランベルジェ(1987)『和文仏訳のサスペンス——翻訳の考え方——』白水社

加藤恭子(2010)『言葉でたたかう技術 日本的美質と雄弁力』文藝春秋

河野哲也(2018)『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶應義塾大学出版会

坂本尚志(2018)『バカロレア幸福論 フランスの高校生に学ぶ哲学的思考のレッスン』星海社

佐藤望編著(2020)『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第3版』慶應義

塾大学出版会

渡邊雅子(2021)『「論理的思考」の社会的構築 フランスの思考表現スタイルと言葉の教育』
岩波書店

2. 雑誌論文

鈴木暁(2011)「『魔女の槌』第1部第3問:スコラ学の議論の進め方」『専修人文論集』PP. 215-
238

3. 新聞書評

鹿島茂評「坂本尚志『バカロレア幸福論 フランスの高校生に学ぶ哲学的思考のレッスン』」『毎
日新聞』2018年3月15日 東京朝刊 P. 12

4. YouTube 動画

La dissertation : théorie de la méthode

(<https://www.youtube.com/watch?v=cP28zpHpbNY&t=1s> 2023年11月20日確認)

La dissertation : exemple pratique de la méthode

(<https://www.youtube.com/watch?v=kmvT8c0Tg6E&t=1250s> 2023年11月20日確認)